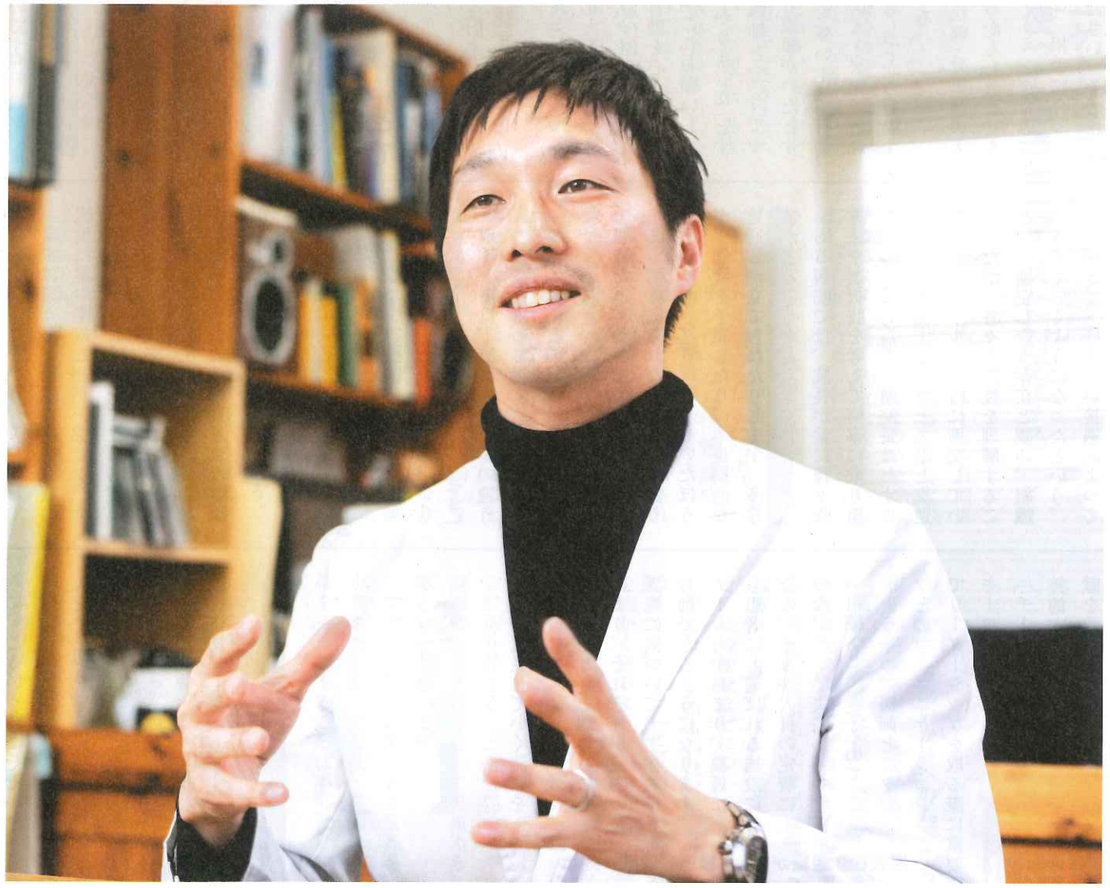
私のキャリアチェンジ Vol.108

ESDなど内視鏡診断・治療のエキスパートがそろう病院で地域の先進的なニーズに応える

文／山辺孝能　撮影／後藤裕基



メディカルトピア草加病院

［消化器内科］

吉田 智彦氏　40歳

ESDによる大腸がん治療にも習熟した吉田智彦氏は、内視鏡の技術を磨くため、大学病院での臨床、大学院での病理学研究、がん治療の専門病院への国内留学と経験を積んだ。そして現在は低侵襲治療のエキスパートがそろうメディカルトピア草加病院で、内視鏡診療部長を務める。自らの技量を地域医療の先進的なニーズに役立てたいと転職した吉田氏の16年間を追った。

吉田智彦氏のキャリアの軌跡

〈東京都出身〉

2004年　昭和大学医学部　卒業
　　昭和大学藤が丘病院　初期臨床研修
2006年　昭和大学附属豊洲病院（現 同大学江東豊洲病院）　消化器内科
2010年　昭和大学大学院医学研究科病理系　医学博士
　　がん研有明病院　内視鏡診療部に国内留学
2011年　昭和大学附属豊洲病院　内科　助教
2014年　メディカルトピア草加病院　入職　内視鏡診療部長に就任

Before

早期発見・早期治療により消化器がんの根治も目指せる内視鏡の専門性を磨く

救命救急科の初期対応で専門性の重要性を実感

ジェネラルな診療ができる医師としての厚みをベースに、これだけはと自信が持てる専門性を伸ばしたい。初期臨床研修で各診療科を回った吉田智彦氏は、自らの10年後の姿をそう定め、さまざまな経験の後、2014年からメディカルトピア草加病院（埼玉県）で内視鏡診療部長を務めている。

吉田氏は5代続く医師の家系に生まれ、ドイツ留学を経験して開業医になった父の「医師は、努力して患者と真摯に向き合えば感謝される、やりがいのある仕事」といった言葉を聞いて育ち、自然と医師を志すようになった。

もっと専門性を養いたいと感じたのは、初期研修の救命救急科での経験にもとづくと吉田氏。

「患者さんの初期対応後、専門の診療科に引き継ぐうちに、治療を最後まで完結できる専門性を身につけたいと思い始めました」

初期研修では各科の医師の診療も大いに参考になり、「多様な症状の患者を診る」といったジェネラルな経験は、医師としての核になっていると吉田氏は振り返る。

がんの早期発見・治療に貢献する内視鏡に興味

研修後は消化管疾患、肝疾患、膵・胆道疾患を扱う消化器内科に入局。化学療法や緩和も含め広範な経験を積む中で、早期発見・早期治療でがんの根治も可能にする内視鏡に興味を持った。

「単純ですが、医師になったからには患者さんを自らの手で治したいという気持ちは強かったと思います。また、先輩に言われた『1例経験して分かる医師もいれば、100例経験しても分からない医師もいる』という言葉をよく覚えています。症例数の多さより、患者との関わりの深さが病気への理解を深め、適切な治療法を選ぶ助けになるとの意味で、症例を病理学の観点から見直し、適切性を検討する大切さに気づきました」

吉田氏は大学病院での臨床を経て大学院の病理系に入学した。

トップレベルを知るためがん専門病院に国内留学

「私は大学卒業後の10年間で、自分のキャリアをある程度完成させたいと思っていましたから、それまでに多様な経験をするため活発に行動していました」

そう話す吉田氏は、学ぶ意欲や内容は環境に左右されると考え、1、2年おきに積極的に環境を変えていった。大学院修了後も一時は大学に戻ったものの、身につけた診断学をがん治療のトップレベルの病院で試し、また内視鏡治療を学びたいと思い、吉田氏はがん専門病院に国内留学した。

「医師のキャリア形成では、やりたい気持ちと正当性が伴えば、『こうあらねば』といったルールは存在しない、私はそう思います。この国内留学も先例はなかったものの、私から医局に目的を説明し、厳しい医局事情でしたが快く送り出してもらいました」

内視鏡でのがんの診断・治療は日本が世界に誇る分野であり、国内のトップレベルに留学すれば、世界のトップを学んだと同義だと説明する吉田氏。がん専門病院で内視鏡診断・治療を数多く経験し、そこで学んだ手技が現在の内視鏡治療を支えているという。

大学卒業後10年の節目に新たなキャリアへ

国内留学から戻った吉田氏は、専門病院で得た知識・技術を大学病院でも実践。それは治療だけでなく、患者の入退院マネジメントなどにも及び、病院のメディカルスタッフとも相談しながら、患者や家族が退院後も安心して暮らせるよう支援を充実させていった。

「内視鏡診断・治療に加え、病院全体で高度ながん治療を提供できる体制を整えたことは、私のキャリアの大きな節目になりました」

そして吉田氏は次のステップとして、内視鏡診断・治療のニーズがまだ十分に満たされていない地域、具体的には都心以外の首都圏近郊の病院を検討したと語る。

「私の知識・技術で地域医療に貢献したいと考えていたとき、メディカルトピア草加病院が内視鏡の診療部長を募集していることを知って応募。院長の金平永二先生が患者さんを真摯に思う姿にもひかれ、転職を決意しました」

After

日本のトップ施設と同等の高品質な内視鏡診断・治療を温かな雰囲気の中で提供したい

34歳で内視鏡室を任され信頼に応えようと努力

同院は、腹腔鏡手術治療の第一人者である金平永二氏が院長を務め、低侵襲治療の中でも臓器温存を主軸に診療を行っている。

吉田氏はいわば同院の根幹となる内視鏡室の運営を一任され、「白いキャンバスに絵を描くように、理想の内視鏡室を作ってほしい」と言われ、驚いたと話す。

「当時34歳だった私は、金平先生から大事な部門を任せてもらい、陰ながら支えていただきました。その信頼に少しでも応えたくて、『がん治療でトップレベルの病院と同等の高品質な内視鏡検査』を、『地域に根ざした温かな雰囲気の中で提供する』ことを目標に、スタッフ一丸となってきました。成果を上げなければ金平先生に申し訳ないので、その場合は半年で辞めようと覚悟していました」

吉田氏の考える高品質とは、内視鏡による診断・治療の精密さはもちろん、患者から見えない部分にも配慮し、安心で安全な医療を提供することだという。

「その点、当院のスタッフは非常に優秀で何をすべきかを熟知しています。患者さんの問診や状況把握など検査前に確認すべき点をしっかり抑え、検査を安全に行えるようにし、検査後も安心してお帰りいただけるようできる限り注意を払っています。こうした対応もあって、『この病院の内視鏡は丁寧で安心』と口コミで広がり、当院で内視鏡検査を受ける患者数は、私が着任してから3倍近くにまで伸びました。ただ当院で重視するのは数よりも、患者さん一人ひとりといかに深く関わり、満足いただけたかどうかです」

より低侵襲な治療であるESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）はがんを的確に内視鏡で診断し、薄い粘膜下層を剥離する高度な治療技術が求められるが、これらは吉田氏の臨床経験や大学院での研究が存分に生かせる分野。

「どんなに困難な症例も最後まであきらめずに完全にきれいに切除し、病理診断に結びつけるようにしています。今までに800人以上の方にESDを行いましたが、皆さまに感謝の言葉をいただき、診療の励みになっています」

チームの一体感や教育など転職後に心がけた3つのこと

医局を離れ、同院の内視鏡診療部長となって6年の間、3つのことを大切にしてきたと吉田氏。

「まずは看護師やメディカルスタッフとの一体感。大学病院ではどうしても医療の中心は医師との感じが否めませんでした。しかし当院は事務職も含め全員が『患者さんに良い医療を提供しよう』という気持ちにあふれ、その連携を生かして、各自が力を発揮できる環境づくりを心がけています」

吉田氏は院内で医療安全を含む5つのカンファレンスの責任者も務め、さまざまなスタッフと接する機会が多いのも楽しみと笑う。

「次に医師やスタッフの教育です。後進の医師に内視鏡の診断・治療に習熟してもらうことは、その人が将来診るであろう、多くの患者さんを幸せにすることにつながります。そのため出し惜しみなどせずに教えています。そしてカンファレンスを重視して、診断に迷うケースは必ず複数の医師の意見を聞いています。そんなやり取りが気軽にできる、オープンな雰囲気も当院らしさでしょう」

最後に医師としての厚みだけでなく、人間としての厚みも大切にしたいと吉田氏はいう。

「診療時間中は忙しいのですが、比較的に早い時刻に帰宅でき、子どもと遊んだり家庭のことを手伝ったり、読書や音楽も楽しむ余裕ができました。これまで治療技術ばかりを磨いてきましたが、転職してからは人間性も十分に養い、患者さんにとって『困ったときに、頼りになる親戚』のような存在になれたらうれしいですね」

内視鏡室で患者に説明する吉田氏